
グリンワーズの災厄の乙女【第一部・迷いの森編】

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリーンワーズの災厄の乙女【第一部・迷いの森編】

【Nコード】

N5469G

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

災厄の乙女来たり 九年前に下った託宣は、一人の少女の運命を大きく変えた。「災厄の乙女」となった少女は迷いの森に閉じ込められ、ただひたすらに己の死を待つ 春・花小説企画参加作品です

1：誰の目にも触れぬ花（前書き）

この小説は文樹妃様主催「春・花小説企画」に参加しております。

1：誰の目にも触れぬ花

この王国を滅ぼすと恐れられた災厄の乙女は、窓辺に置かれた長椅子ですやすやと眠っていた。

真っ白な髪は腰ほどまであるだろうか。眠っているから確認は出来ないものの、資料によれば瞳の色は緑だという。肌は不健康と言いたくなるほど白い。胸に置かれた手はか細く、この手が王国を滅ぼすなんて何かの間違いじゃないかと笑いたくなる。

九年前　大神官による託宣が王国を揺るがした。一年の始まりに、その年のことを占う場での出来事だった。

厳格な性格の大神官が、狂ったように叫んだ。

災厄の乙女来たり、と。

白き肌、白き髪にして深緑の瞳をもつ乙女、この国に災厄をもたらす、と。

その託宣は瞬く間に広がり、王都から遠く離れた地に住んでいた、わずか五歳の少女は村人の密告によって王国へと引き渡された。

災厄の乙女を殺せば、その身体からあらゆる災いが王国へと広がるだろう。少女を一目見た大神官はそう国王へと進言した。

小さな女の子を殺すのは忍びない、そう考える人間も多く、少女は王都の近くにあるグリーンワーズの迷いの森の中に閉じ込められた。森の奥深くにそびえる塔から出ることが叶わず、派遣された騎士によって常に監視されている。

少女は驚くほどに従順で　大人しく暮らしている。少女の監視

に割かれる騎士の数が年々減るほどに。

民はもう、災厄の乙女などいう存在を、忘れてしまっただろう。

眠る少女の頬に手を伸ばし、触れるか触れないかしばし悩んで、起こさないようにそつと触れた。

「長かったなあ、ここに来るまで」

左目を負傷し、騎士として今までと同じように戦うことが難しいと宣告され、懇意だった騎士団長はこの塔の常駐監視役として推薦してくれた。

左目は黒い眼帯で隠されている。最初は距離感がつかめなくなつたが、最近ではもうだいぶ慣れた。まだ幼さの残るこの少女が脱走しないように見張ることくらい、朝飯前だ。

静かに見下ろしていると、少女が重たそうに瞼を開ける。

「……だれ？」

まだ半分くらい夢の世界に浸っているような、現実感のない声だった。

うつすらと開けられた瞳は、深い森と同じような緑色だ。

「あんたを、殺しに来たんだよ」

自分でも驚くほどに、歪んだ感情が溢れた。

本気を出せば今すぐにでも、細い首をへし折れそうな華奢な少女に向かって。

少女はわずかに微笑んで、そして再びまどろみの中へ落ちていく。安心しきつたような寝顔が、癪に障った。

「あなた、新顔でしょう？」

ふわりと柔らかく微笑んだ災厄の乙女は、今までの人生の闇を感じさせることなく、明るい声だった。

どうやら、寝ぼけて最初の遭遇の時のことは覚えていないらしい。

「名前は？」

「……レギオン」

この塔の警護についている騎士は、災厄の乙女に敬意を払わない。それも当然だ。少女は世に禍をもたらす人間なのだから。

少女は一度確かめるように呟き、曇りのない笑顔を向けた。

「素敵。良い名前ね」

「どうも、あんたは？」

言ってから後悔した。名前を知る必要はなかったのに。名乗ればやはり反射的に問うてしまう。

「ごめんなさい。覚えてないの」

名前を聞いた時と同じように柔らかな笑顔で少女は答えた。聞いたこちらが思わず硬直してしまうくらいに、自然に。それはまた一つの違和感を芽生えさせる。

「……呼ばれることがないと、名前って忘れちゃうものなのね」

来たばかりの頃は覚えていたんだけどね、と少女はまた笑う。

何がそんなに楽しいんだと問いたくなるほどに少女は嬉しそうに笑った。しかし数日彼女を見ていれば、会話する人間すらないんだということに嫌でも気付かされた。彼女を監視する騎士も、世話するための使用人も、まるで彼女が存在しないもののように動く。それが憐れだとは思えない。

思ってしまったえば八つ当たりに似たこの憎しみが薄れるだろう。

白銀の髪に、翡翠色の瞳。

災厄の乙女の特徴に似ていると言えば似ていたのだろうか。当時

はまだ八歳だった。

死に様は悲惨なものだった。わずか八歳の少女を、村中の人間が寄ってたかって殴り、蹴った。肌は白というより紫色になっていて、顔はほとんど誰か分からないような有様だった。

ヒルダ。

災厄の乙女と疑われて、殺された妹。

鄙びた土地だった。災厄の乙女の噂などばらばらでしか入っていない。特徴と、それが王国を滅ぼすと、それくらいしか。

災厄の乙女を殺せば災いが溢れ出すとか、すでに捕まったただとか。

それが村人の耳に入っていれば、妹は、ヒルダは殺されずに済んだというのに。

白い髪に、深い緑色の瞳。

出会った災厄の乙女は、死んだ妹よりも年下だった。死んだ段階でヒルダの時は止まっているから、年下というのも変な話だが。

「レギオン」

俺が廊下の途中で立ち止まり、窓の向こうを見ていると、塔の中を散歩していたのだろう。彼女は無邪気に話しかけてきた。

無視しようかしないか迷い、結局「なんだ」と答えてしまった。

くす、と笑い、白い髪が揺れた。楽しげに近づいてくる彼女はいつもと同じように微笑んでいる。

「あなただけね、私と話してくれるの。無視できないのは性格？」
「うるせえ」

出来る限り短く答える。あまり慣れ合いたくはなかった。

深緑の瞳はしっかりと自分を捕えていた。その瞳の奥に芯の強さを感じた。柔らかく微笑むのとはまるで正反対の性質が彼女の中にあっただ。

「ねえ」

真っ直ぐに自分を見つめる瞳に少し居心地の悪さを感じて、目をそらした。窓の向こうには深い森が見えるだけだ。塔のすぐ下にはわずかながらに拓けた土地がある。そこには野生の花が咲いていた。その花の色に、故郷を思い起こして苦しくなった。

「いつになったら、私を殺してくれるの？」

名前を聞いた時と同じように明るい声で、柔らかに微笑んだその表情のままで、災厄の乙女は無邪気に問いかけた。

自分の耳を疑うのと同時に　あの時彼女は目が覚めていたのだと知る。

「寝ぼけてるのか」

動揺を悟られないように、冷静になれと頭の中では言い聞かせている。しかし声は少し震えていた。くそ、と内心で毒づく。

「私がついさっきまで寝てたように見える？」

それとも、もう就寝の時間かしら？　と皮肉たつぷりに少女は切り返す。わずか十四歳の　自分より十近く下の小娘でも、女は女かと苦笑する。口で女に勝つのは難しい。

「白昼夢だよ」

「ふうん。白昼堂々殺せないってこと？　夜ならいいの？」

どうやら誤魔化すつもりはないらしい。

ふう、と溜まった息を吐き出す。彼女は大きな瞳でこちらをじっと見上げる。無遠慮な目に、居心地が悪くなる。この少女はいつも相手を射抜くようにじっと見てくるのだ。

「殺してほしいのか」

呆れたように問うと、災厄の乙女はまるで花が今咲いたのかと錯覚するほどに眩しく、微笑んだ。

まるで飴玉をねだる子供のように、嬉しそうに笑いながら手を伸ばす。

その小さな手が首筋に触れた。子供の体温だな、と冷静に見下ろす。

「願ったら、殺してくれる？」

淡く微笑む少女は、手のひらのぬくもりとは正反対に大人びている。

その小さな唇から発せられたセリフに、一瞬身の毛が凍りついた。

「同情でも、憐れみでもなく、心の底からの憎悪で」

首に触れる手のひらに力が込められる様子はない。ただ真っ直ぐに見つめ返し、低く呟いた。

「今、この瞬間でも、俺はあんたが憎いよ」

その瞬間、悲しみと喜びが入り交ざった複雑な表情で、少女は微笑む。

「なら私も心置きなく死ねるわ。もし本当に私が殺されて、災厄が王国に溢れるのだというのなら　あなたはその中心に立つんだもの」

するりと首筋から手は離れ　少女はそのまま背を向けて立ち去る。

「
」

何故か呼びとめようと、言葉を探した。

そして彼女に呼ぶ名前もないことに気づかされる。

声は音にすらならず、そのまま喉の奥へと飲み込まれる。声にならぬ声は喉の奥にひっかかったまま、居心地の悪い気分させられた。

死にたいのに、死なない　否、死ねないのか。彼女は。

彼女が殺されると国に禍が溢れ出す。それが確かな偽りだという証拠もなければ、彼女は自ら死ねないのだ。

自分を存在しないものとして扱う他人の命を、奪うわけにはいかないと　自分の死という願いを押し付ける相手にすら、優しさではなく憎しみを求めるほど。

それほど、彼女は優しいのか。

しばし物思いに耽っていると、カッソと足に何か当たった。

「？」

拾い上げてみるとそれは、ネックレスのようだ。鎖が切れてしまっている。鎖の先には長方形型のプレートが揺れていた。表には花の模様が彫られている。ちょうど塔の外で咲いている白い花と同じだ。

そういえば、こんな感じのネックレスを生まれた子供に与える地域もあったな、とプレートをひっくり返す。

『最愛の娘・マリーツィアに、最大の幸福を』

裏にはそうメッセージが彫られていた。やはり思ったとおりの類のものか、と拾った物をポケットにしまった。侍女あたりの落し物だろう。

千切れた鎖が、ポケットの中で小さな音をたてて存在を主張していた。

まるで誰の目にも触れることなく咲く花のように。

1：誰の目にも触れぬ花（後書き）

こんにちは、またははじめまして。
ようこそおいてくださりました。

前書きにもあるように、この作品は「春・花小説企画」に参加しております。

テーマの花は鈴蘭となりますが、花言葉は最終話にのせておりますので、ご了承ください。

どうぞごゆるりとグリーンワーズの森をお楽しみください。
あなたの読書のひとときの、良いお供となれますように。

2：失われた名は今、

塔にやって来てから、一か月が過ぎた。

もうとうに春を迎えたというのに、森の中は肌寒い。あちらこちらに春の花が咲いているので見る目には春めかしいことに変わりはないのだが。

窓の向こうでは色とりどりの花が美しさを競うように咲き誇っている。新しい葉が芽吹き、世界は優しく淡い色に包まれていた。

ちやり、とポケットの中に入ったままのネックレスが、主のもとへ帰れない不遇さを訴えているようだ。

持ち主は、侍女の中にはいなかった。

そして侍女以外に『マリーツィア』なんて名前の人間がこの塔にいるとすれば、それはただ一人だ。

あれ以来、まともに話していないのでこれを見つけたと差し出すのが躊躇われた。

「レギオン様」

ポケットの中のネックレスに触れながら、どうしたものかと考えていると、侍女の一人が控えめに声をかけてくる。

「どうした？」

侍女は困ったように目をきよろきよろさせて、口籠もる。

「その、災厄の乙女が」

続けて発せられた言葉に、頭を押さえる。

災厄の乙女は塔から出ることは許されていない。しかし物理的には出ることは可能だ。

それを止めるのが塔にいる侍女や騎士の役目で、決して外に出た

のを見つけて俺に報告するのが仕事なわけではない。

しかし侍女や騎士は「災厄の乙女」の存在を無いものとしているほどに、関わりたくないらしい。

「おい」

塔の近くの平地に座り込み、呑気に花を摘んでいる少女を見つけ、声をかける。

少女の周りには白い小さな花が咲いていた。他にもいくつか花が咲いているが、可愛い外見には似合わない生命力を持つ白い花はあちらこちらに花を咲かせている。ちょうどプレートに彫られていたのと同じ花。

「あら、レギオン。どうしたの？」

「どうしたの？ じゃない。おまえは塔から出ることは許されてないだろうが」

早く戻れ、と怒ると少女はきょとんとした顔で言う。

「でも私、このくらいの距離ならよく出歩いてるけど？」

「……なんだって？」

信じがたい言葉に、眉間に皺が刻み込まれた。

「だって、誰も止めないし呼びに来ないんだもの。だから塔の周りにくいだったら時々出歩いてるわ。森の外には逃げ出さないから、放っておかれてるっていうか」

「……塔の連中は何してるんだ」

はぁ、と溜まった重い息を吐き出す。いくらなんでも職務放棄だ。責任者としてきつちり報告させてもらおうとしよう。

「とりあえず、戻れ。俺がいる以上勝手は許さん」

「いいじゃない、レギオンが見張ってるんだもの。もう少しくらい、そう言いながら彼女は白い花を摘む。花は簡単に根ごと抜けた。

「……それには毒があるぞ」

愛らしい白い花は、その姿には似合わない生命力と毒を持っていた。忠告なんて必要ないはずなのに、気がつけば声に出していた。

「へえ、そうなの？ こんなに綺麗なのに」

くすくすと笑いながら、小さな花に口づける。

「っおい！」

花卉には毒はなかったはずだが 毒があるといった矢先の行動に慌てた。無理やり彼女の手から花を奪い取ると、彼女は俺を見上げながら笑う。

「変なの。私に死んでほしいんじゃないの？」

「死なれたら困る」

殺したいと思うほどに、憎い 憎かった、になりつつあるけれど。

渡すなら今か、とポケットの中からネックレスを出し、彼女の目の前に差し出す。

「……おまえのか？」

揺れる長方形型のプレートをしばらく見つめながら、彼女はそつと手を伸ばした。壊れものに触れるかのように優しく、ネックレスを受け取る。

「無くしたと思ってた。前に鎖が切れちゃってからずっとポケットに入れてたんだけど」

「それなら直しておいた」

切れた鎖はもう一度繋がっている。そのことを確認して彼女は「本当だ」と柔らかく微笑む。彼女はネックレスをつけて、胸元で揺れるプレートを眺める。

「ありがとう、レギオン」

嬉しそうに微笑みながらお礼を言われるなんて想像もしていなかったなので、少し照れくさい。

「……おまえ、文字読めないのか？」

照れ隠しのついでに問うと、彼女は当然のことのように頷く。「教えてくれる人間がいると思う？」

いつの間にかいつもの自嘲的な笑顔に戻っていた。苦笑しつつ、いるわけがないな、と心の中で答えた。

「そうだろうな。文字が読めれば、名前を忘れるわけもない」

そう言いながら、彼女の首から下げられた花の模様が彫りこまれたプレートをはっきり返す。

「これ、名前だったんだ」

文字の読めない彼女は、プレートに刻まれた文字をいとおしそうになぞる。

「『最愛の娘・マリーツィアに、最大の幸福を』」

ゆっくりと読み上げながら、彼女の手を掴んで読み上げるのと同じ速度で文字をなぞった。そうすれば彼女は自分の名前だけは認識できるだろうと思ったからだ。

「……マリーツィア」

彼女の長く白い髪が風に揺れていた。その髪に少しだけ見惚れていた。

失った名前を、彼女が　マリーツィアが取り戻した瞬間だった。深い緑色の瞳から、一滴だけ涙が落ちた。何度も何度も自分の名前を呟いて、その音を確認かめていた。

ぎゅ、と大事そうにプレートを握り締めて、彼女は俯く。もしかしたら涙が止まらなくなったのかもしれない。

「戻ってるぞ」

一人にした方がいいだろうと、一人塔に戻ろうと立ち上がる。しかし上着の裾が引かれ、体勢を崩しそうになった。

見下ろせば、彼女がしっかりと上着の端を握り締めている。

傍にいろということか、と苦笑し、そのまま立ち尽くす。

一体どこの誰が、こんな小さな少女を災厄の乙女だというのだろうか。

花に囲まれて静かに泣く少女は名前を忘れるほどに顧みられることなく、ただ一人でこの塔で生きてきた。

彼女を守るために、世話するためにいる者に存在する理由はなく、機械的に食事が用意され、服が用意され、行動が制限される。

上着の裾を握り締める小さな手に、王国に危機を呼ぶような危うさは無いのに。

少なくとも 彼女の親が、彼女を「災厄の乙女」として見ていなかったことだけが救いだろうか。

災厄の乙女として連れて行かれる娘に、あんな言葉を託したネックレスを持たせるほど、彼女は愛されていたのだろう。

ぽつり、と頬に空から降った滴が落ちる。

「雨か」

ぽつぽつと、雨は徐々に速度と量を増してくる。これは大雨になりそうだな、と灰色の重たい空を見上げて思う。

「戻るぞ」

さすがに雨の中じっとしているのは馬鹿のすることだ。未だに座り込んだままの彼女を立たせ、その腕を引く。

しかし彼女は大人しくついてくる様子はなく、引いた手はぴんと伸びたままだ。

「おい」

びしょ濡れになりたいのか、と言おうとして振り返る。雨はもう随分と雨足を強めている。

彼女は俯いていた顔を上げて、儚げに微笑む。

「ありがとう、レギオン」

濡れた頬は、それが雨なのか涙なのかも判別させない。

「……それは聞いた」

ネックレスを渡したその時に。

雨は容赦なく降り注いだ。打ちつける雨粒が少し痛いと感じるほどに。

「うん。さっきのはこれを直してくれたお礼だから。今のは、私の名前を見つけてくれたお礼」

雨の中でふわりと微笑む。その笑顔が今すぐ消えてしまいそうな
ほどに危つく感じた。

今手を離せば、今にも掻き消えてしまいそうな気がした。

「マリーツィア」

気がつけば、消えてしまいそうな彼女の名前を呟いていた。
現実引きとめるために。このまま彼女を幻にしてしまわないよ
うに。

「……………良い名前だな」

笑ったつもりだったが、上手く笑えていたかは分からない。
ただ目の前の彼女は微笑み返してくれる。春の野の花が咲くよう
な、淡く優しい微笑みだった。

3：歌声はあの日の夢を

重い雲が月を隠して、その夜は闇がより濃く光さえ飲み込まれそうなほどだった。

眠ろうと横になったが眠気もやってこない。静かな雨音が良い子守唄になってくれると思っていたがそうでもないらしい。

ふう、とため息を吐き出して、起きあがる。窓を開けると、雨音以外の音が聞こえた。

「？」

耳を澄まして聴いてみると、それは本物の子守唄のようだった。可愛らしい鈴の音のような、歌声だ。

皮肉なことにその声には覚えがある。彼女の声をここで一番よく知っているのは、おそらく俺以外にはいないだろう。

上着をはおり、上の階へ向かう。

災厄の乙女を閉じ込める為の塔　　彼女はその最上階にいる。

「……子供は寝る時間だぞ」

ノックしたが反応がなかったので、無断で部屋の扉を開ける。

部屋の主は驚いたように目を丸くし、歌声がぴたりと止む。彼女はいつか眠っていた窓辺の長椅子に座り、こちらを見ていた。

「なに、してるの。レギオン」

寝間着に着換えている少女は相変わらず頼りないほどに細く、長く白い髪は闇夜の中の唯一の光のように浮かび上がって見えた。

「夜更かししてる悪ガキを注意しに来たんだ。窓開けるな、雨が入るだろ」

歌声が聞こえた原因だろう。大きな窓は開け放たれていた。雨が部屋に入り込むほど強くはないだろうが　　夜風は身体に悪い。

「レギオンも夜更かししてるじゃない」

「俺は大人だから許されるんだよ」

一瞬部屋に入るか悩んだが 就寝前の少女の寝室に入り込んだ、と怒り狂うような人間は残念がらない。本人もまるで頓着せずに、歩み寄る俺を見上げていた。

「なんだってこんな夜に歌なんて」

呑気に歌うなら、昼間に晴れた空の下でも歌っていればいい。

呆れたように呟くと、彼女は苦笑した。

「癖、なんだよね。時々こうして歌うの。名前とかさ、呼ばれないと忘れちゃうでしょう？ そのうち話し方も忘れちゃうんじゃないかなって、小さい頃不安になって……」

そうし始めたのは、おそらく自分の名前を忘れてしまった頃なんだろう。わずか五歳の少女が自分の名前を忘れるまで、どれほどかかったのかは想像も出来ない。人間の記憶というのは五歳前後で切り替わるというから 忘れてしまったのも無理はないのだろう。

「声の出し方を忘れないように、唯一知ってる歌を、夜にこっそり歌うようになったの。小さな頃は、大人の目が怖かったから」

窓の外を眺めながらマリーツィアは呟いた。

耳を塞ぎたくなるような気持ちに襲われながら、冷静な自分がそれを止める。

彼女を 災厄の乙女を憎むことが、初めから八つあたりのようなものだと思っていた。

俺には彼女を憐れむ資格も、慰めることも許されない。可哀想だなんて思うことで憎しみが揺らぐなら、初めから彼女に不用意に近づかなければいいのだ。

今更、彼女から目を背けるのは間違っているだろう。

「 ホント、手に負えないガキだな。おまえは」

彼女の隣に立ち、その長い髪を撫でる。

優しくされることに慣れていないんだろう。マリーツィアは困ったように俺を見上げた。その緑色の瞳が揺れてる。

「……もう寝ろ」

くしゃくしゃ、と少し乱暴に髪を撫でて短く言う。

そのまま部屋に戻ろうと扉に向かうと「たまに」とマリーツィアが口を開いた。

「たまに、レギオンみたいな人もいたよ」

それはたぶん、彼女を無視できずに話しかけてしまう馬鹿な人間のことだろう。

「みんな、ここから出ていっちゃったけど」

そうだろうな、という言葉は口に出さなかった。塔の人間は頻繁に入れ替わる。災厄の乙女の子守りなんて損な役回りだ。出世できるわけでもないし、名誉ある仕事でもない。

「……みんな、優しくてひどい人達だった」

真っ直ぐに見つめてくる瞳に、わずかな悲しみが宿る。おおそのことは察しがつく。自分も同じ種類の人間だからだろう。

「そうだろうな。……俺も、同じだよ」

苦笑しながら、一度飲み込んだ言葉を口に出す。

そのまま何も言わずに部屋を出た。扉の閉まる速度が不思議なくらいにゆっくりだった。

彼女を無視することはできないのに。

彼女を一人ここに残していく。

人の優しさを染み込ませておいて。

より一層の孤独を感じさせる。

その夜は、もうあの子守唄は聞こえなかった。

ヒルダは、明るい女の子だった。

八歳も下に出来た妹だったから、殊更に可愛がっていた。ヒルダ

が五歳になる前に両親とも流行病で死んでしまったから、二人だけの家族だった。

そのせいかヒルダはしつかり者だった。家事も率先して取り仕切り、死んだ八歳の頃には俺に手出しをさせない分野まで出来ていたくらいだ。

兄妹といつても外見は似ていなかった。白銀の髪のヒルダは、いつも俺の金髪を見て羨ましがっていた。俺としてはヒルダの髪も綺麗だと思っていたけれど、今となっては同じ金髪だったら、と思つてやまない。

小さな頃から珍しい髪のことと同年代の男子からいじめられることが多かった。

その度に駆けつけてはいじめっ子を退治してきたものだが、あれも好きな女の子をいじめてしまう男の子の典型図だったんだろう。ヒルダの死を知らせてくれたのはまさにそのいじめっ子だった少年達だった。

災厄の乙女の噂は伝わっていた。

しかし今までヒルダを可愛がっていてくれた村人達が、危害を加えるかもしれないなんて考えたこともなかった。

だってヒルダの髪は白くない。

ヒルダの瞳は深い緑じゃない。

「レギオンっ！！」

血相を変えて駆けつけてきた少年達の口からは、信じられない言葉が飛び出した。

「助けて！ ヒルダが大人達に殺される！！」

しかし身体は咄嗟に動いた。あまり使われていない剣を持ち出して、少年達の後を駆けていく。

確かに、その年は不作だった。

天候も悪く、嵐が村を襲うこともいつもより多かった気がする。でもなんでそれが『災厄の乙女』に繋がる？

なんでそれがヒルダのせいになる？

「ヒルダっ！！」

町の広場には、人だかりが出来ていた。

大人の男が何人も何かを囲うようにして壁を作っていた。女達は顔を真っ青にしてそれを見つめていて、一部にはそれを増長するように『災厄の乙女』を非難する者もいた。

剣を抜いて、気がつけば叫んでいた。

「どけえええええ！！」

その時の俺は、おそらく鬼のような形相だったのだろう。男達は怯えるように散り、女達はそそくさとその場から逃げた。

それまでの人だかりが嘘のように人気のなくなった場所の中央に、ヒルダは横たわっていた。

「ヒルダ……？」

長く綺麗な白銀の髪は泥だらけで、白く透き通るような肌は、元の色が分からなくなるほどに変色していた。顔は血だらけで、腫れ上がって、翡翠の瞳は固く閉ざされたまま。

恐る恐る触れてみれば、氷のように冷たかった。

いつもいつも、いじめられているヒルダを助けるのは自分の役目だった。

なのに、肝心な時に、間に合わなかった。

「ああああああああああああああ！！」

いくら叫んでも叫んでも、叫び足りなかった。冷たい妹の身体を強く抱きしめて、何度も名前を呼んだ。

その後、ヒルダを暴行した男達は捕まった。

そしてその時になって『災厄の乙女』はすでに見つかっていたことも知らされた。

当前、村に居づらくなった俺はそのまま王都の親族を頼って移り住み、騎士団へ入団した。村にはそれ以来、ヒルダと両親の墓参り

くらいにしか戻っていない。もちろんその時村人と話すこともなかった。

ヒルダの墓がいつも綺麗なのは、村人達の罪滅ぼしなのだろうか。行くとびに墓には綺麗な花が供えられている。

ヒルダを殴り、蹴り殺した男達も。

それを囃したてた女達も。

あの時見て見ぬふりしていた奴らも。

許されるわけがない。

許せるわけがない。

けれど何より 災厄の乙女なんていう存在が、俺には許せなかった。

それと同じくらいに、無力な自分も。

4：残酷な願い

目覚めてすぐに、深緑の瞳と目が合った。

しばしの間、現状を把握するために脳が活動する。ほんの少し距離を詰めればそれこそキスできるほどの近さに、なぜ彼女がいるのか。

朝には普通に起きて、仕事をしていたはずだ。主に面倒な子守りを中心として。その他の雑務を片付けるために机に向かっていたはずだが、いつの間にか寝ていたらしい。そこまでは簡単に理解できる。

「……何してるんだ」

問題は、俺の監視対象である彼女が、どうしてこんな至近距離で俺の寝顔を見ていたのか、ということだ。

「珍しいね、レギオン。居眠りするなんて」

質問には答えず、くすくすと笑いながらマリーツィアはいくつかの書類が重なった机の上に腰掛ける。

「夢見が悪くて、良く眠れなかったんだよ」

夜にはヒルダが死んだ、あの日のことを夢に見た。

何度も何度も同じ夢を見てはうなされる。成長していないのか、過去に囚われたまま今も俺は動いていない。

乱れた前髪をかきあげる。髪も伸ばしたままにしているから邪魔だ。長い前髪は眼帯を隠すのにちょうどいいのだが、視界を狭めるのは考えものだなと思う。

「その目、どうしたの？」

机に腰掛けたままマリーツィアが見下ろしてくる。今更な質問に苦笑した。

「以前任務中にな。斬られたんだ」

「ふうん……残念。綺麗な紫色の目なのに」

そう言いながらマリーツィアは眼帯越しにそっと触れてくる。

「まだ痛む？」

「まさか」

小さな子供と同じ質問に思わず笑う。もう塞がった傷が痛むなんて、そんなわけがないのに。

眼帯に触れていた手がそっと頬に移動する。なめらかな指先がなぞるように頬を撫でた。

十四歳の少女には無縁のはずの色気を感じて、心臓が高く鳴った。動揺を悟られないように平静を装う。

吐息が頬にかかりそうだと、と間近に迫る彼女を見つめて思う。

「……………ねえ」

静かにマリーツィアの口が動く。

しんと静まり返った部屋にその声は不思議なほど大きく響いた。

「……………ヒルダって、誰？」

目の前に深緑の瞳があった。

ゆつくりと静かに出されたその名前は、うなされた夢の中に出てきた妹のものだ。

ふう、と息を吐き出して、頬に触れる手をそっと引き剥がす。慣れない見下ろされる感覚から解放されるようにすっと立ち上がった。

これ以上彼女と目を合わせているのは無理だった。

「妹だよ」

ふうん、とマリーツィアは呟く。信じていないようなその響きに少しだけ苛立ったが、すぐに冷めた。

「それで、どこに住んでるの？　こんな所にいたんじゃそう会えないでしょう？」

そう問いかけるマリーツィアは、まるで恋人の浮気を問い詰めているようだ、と他人事のように思う。誰が誰の恋人だと、内心で笑

った。

「死んだよ」

その言葉は驚くほどあっさりと言になった。

一方マリーツィアは予想外の答えだったのか　言葉を失って、

その大きな瞳でただじっとこちらを見ていた。

この続きを言えというのか、と俺は誰かに言いたくなる。この先を、この俺に、言わせるのか。彼女に向かって。

「九年前に、殺された」

九年前、と彼女の唇が音をなさずに動く。

おそらく彼女の頭の中では九年前の出来事を思い出しているのだろう。彼女には記憶があまりないだろうが。

「災厄の乙女の託宣が下ったのと、同じ年だよ」

彼女の疑問を確信に変えるために、俺は続けて呟く。

ああ、と彼女は微笑んだ。彼女の中で俺と九年前の出来事と、そして俺の目的が符号したのだろう。

机に腰掛けたまま　マリーツィアは俺を見上げて笑う。

「だから、レギオンは私を殺したいんだ？」

こんな会話をするたびに思う。

なぜ彼女は笑えるんだろう、と。

質問には答えなのまま、彼女を残して部屋から出た。これ以上傍にいたのは辛かった。

殺したいのかという質問に、以前のように即答できない自分に嫌でも気づかされるから。

しばらく、お互いに近寄らない日々が続いた。

その方が良いと思ったから、声をかけることも止めた。夜更けに聞こえる歌声にも気づかぬふりを続けて、塔の中ですれ違う時には忘れず挨拶だけは交わした。完全に無視できないあたりに自分の弱

さを見せつけられるような気がして仕方なかった。

それでも、彼女の存在を無にする他の連中と同じようには出来なかった。

その度に彼女は苦笑して挨拶を返す。「馬鹿な人」だとあの緑色の瞳が言っているような感覚に何度も襲われる。

春が深まり、森の中でも温かさを感じるようになった頃だ。

「どういうことだ」

挨拶以外で彼女に声をかけるのは随分と久しぶりだった。しかしそんな感傷に浸る余裕はなかった。

「どういうことって？」

マリーツィアはいつものように笑いながら問い返す。

その様子に苛立ちを感じながら、努めて冷静に言い返す。

「塔の人間が皆出ていくらしいな。俺はそんな許可出した覚えはないが？」

侍女も騎士も全員が自分の荷物をまとめ始めていた。このままだとこの広い塔には彼女と俺だけになる。

「私が言ったのよ。面白いよね、普段は無視するくせに自分に都合の良いことはあっさり聞き入れるんだもの」

くすくすと笑いながら、マリーツィアは慌ただしく動きまわす侍女たちを眺めている。

「俺はそんなことを聞いてるんじゃないよ」

「森からは一歩も出ない。私を一人にしてほしい　なんて悲劇のヒロインにぴったりのセリフだと思わない？」

問い詰めようとしたら、彼女に言葉を遮られた。

訝しげに見つめると、彼女は微笑みながら続ける。

「嫌なのにこんな所にいる必要ないじゃない。今までだって監視が意味をなさなくても私は逃げたりしなかったわ。つまり監視なんて必要ないってことでしょう？」

王国の人々が『災厄の乙女』なんて忘れてしまっただけ、彼女はひっそりと生きてきた。

マリーツィアは手を伸ばし、いつか触れた時と同じように眼帯に触れた。その指先は頬に触れることなく、伸ばしたままの俺の前髪をかきあげた。

「ねえ、レギオン。私を殺してくれる？」

それは何度も聞いた問いだ。

子供のように無邪気に笑いながら、時には真剣な瞳で見つめながら、彼女は何度も何度も俺に死という安楽を求めた。

「……………」

答えられずにいると、マリーツィアは苦笑した。

「ほら、もう無理なんだ。私に同情してるから。私への憎しみが薄れてしまったから。そんなことで妹さんは浮かばれるのかな？」

それは俺を挑発するために用意された言葉だったんだろう。しかし俺は無言のまま彼女の深緑の瞳を見つめた。

「私をいつか殺してくれるって、そう信じてた。でもレギオンは私を裏切るんだね」

じつと、目を離すことを許さないくらいの力で見つめてくる彼女を、俺はただ無心で見つめ返した。

なら、もういない。

マリーツィアが小さく呟く。同情するだけの存在なら、いらないと俺を拒絶する。

「だから、レギオンも出て行って」

じつと、片方しかない俺の瞳を見てマリーツィアが言う。

その決定打は、殴られたような衝撃があった。どうして自分がこんなにショックを受けるのかも、分からなかった。

「あなたは、今までで一番優しくてひどい人だった」

一瞬だけ泣きそうなお顔で、そう笑う。

彼女はすべてを拒絶することにしたのだ。これ以上自分が傷つかないように、自衛のために。

するりと手は離れ、マリーツィアは長い髪を風に揺らして塔の外へと出ていく。

「マリーツィア！」

いつかは呼びとめる名前がなかったが、今はある。

マリーツィアはゆっくりと振り返り、そして微笑む。泣き出しそうな顔で無理に笑顔なんて作らなくていい。見ているこちらの胸が痛い。

「……レギオン。もし、まだ私を殺してくれるつもりが少しでもあるなら　待っているから。この森で。レギオンが私への憐れみを無くして、純粋な憎悪で剣を向けてくれるその時を」

どうして、そんな残酷な願いを口にするのだろう。

何も言えないまま、何もかもを拒絶するようなマリーツィアの背中を見送った。

ぼつりぼつりと侍女の姿は消え、騎士という見張りは消え去り最後まで足掻き続けた俺にも、正式な形で新しい仕事の下された。王都へと戻った俺には新米の騎士の教官役が押し付けられた。それくらいの仕事は出来るだろうと笑ったのは、俺にあの塔の仕事を回してくれた騎士団長だった。

グリーンワーズの森にはもう、災厄の乙女しかない。

5：その罪はただ一人の嘘から

あのグリーンワーズの森での寂しく騒々しかった日々から一年が経とうとしている。

また、春が巡ってきた。あの森はまだ肌寒いのだろう。それでもたぶんあちらこちらに色とりどりの花が咲いているんだろう。どこか懐かしい香りを漂わせながら。

「レギオン」

新しい団員のしごきに行こうかと剣を片手に歩いていると、馴染みの騎士団長に話しかけられた。

「あ、お久しぶりです」

若干姿勢を正して頭を下げる。堅苦しいな、と団長は笑って気軽に声をかけてくれた。この人の気安い感じが若い騎士達から人気を集めている理由だろう。

「この仕事にも慣れたようだな……ところで、おまえ」

後半で笑顔が消えた。声のトーンも低くなる。その空気の変化を感じ取って、逃げたい衝動にもかられた。

「何を嗅ぎまわってるんだ？」

空気が凍りつくほどに固まった。

さすが騎士団をまとめあげる男だけあるな、と俺は父親ほど年の離れている団長を見上げる。

この人になら話してもいいだろう、と俺は口を開いた。

「……災厄の乙女について、ちょっと」

口に出して、自分でも苦笑してしまった。

なんて未練たらしいんだろう。彼女は必要ないと俺を拒絶したの

に、あの森を去っても俺はまだあの少女を見捨てれずにいる。

この一年、王都に戻ってから仕事の間際に情報を集めた。九年前　もう十年前になるあの託宣について。

「あの塔に行かせたからか」

団長は少し責任を感じさせてしまったのだろうか　いえ、小さく答える。

「性格なんです、たぶん」

あの塔にいて、彼女を無視できなかったのも、憎しみを強めることができなかったのも　関係ない今でも、忘れることができないのも。

「むしろ憎んでいたはずの相手を、この手で殺すことも出来ず、まして憐れんでいるなんて」

情けない話ですね、と笑うと団長は苦笑した。

「それは、憐れみだけか？」

わずかにからかうような響きのあるその言葉に、思わず顔を顰めた。

「冗談やめてください。相手は十も下の小娘ですよ」

可愛らしい外見に似合わず、中身がかなり強烈な。

「別に問題ないだろ、俺と家内は八つ歳が離れてるぞ」

予想もしない話の転がり方に少し動揺した。どうしてこんな話になったんだろうと振り返っていると、団長が距離を詰めてきた。

「……大神官に面会を求めたそうだな」

団長が声を潜めたのは、あまり周囲に聞かれない話だからだろう。ただ一度小さく頷いた。

本当は、王都に戻ってからすぐに、大神官へ面会を求めた。しかし遥か上の人でもあるし、多忙な人でもある。何度も求めてやっとこのたび面会の機会が与えられたというわけだ。

部屋にはこの一年で集めた情報がある。

そう多くは必要なかった。災厄の乙女とは何なのか。辿り着いた答えは大神官が握っている。

神殿へ行くと、案内役の人間に奥へと通された。

清浄な空気といえはいいのだろうか、神殿という建物自体が土地を浄化しているような気がする。

大きな扉の前まで来ると、案内役がそのまま扉を開けてくれる。

随分丁寧な扱いだな、と慣れない行動に苦笑する。

「失礼します」

一礼して部屋に入ると、上等なソファに厳格そうな男性が座っている。遠目には年老いた印象があったが、間近で見えるとそうでもないらしい。五、六十代といったところだろうか。

「初めまして、ですね」

柔和な微笑を浮かべる男性は、どこかに芯の強さを感じさせる。

「以前から面会希望のお話は伺っていましたが　この私に、どのようなお話が？」

出された紅茶に手をつけずに、まっすぐに大神官を見て話す。

「　災厄の乙女について、です」

ぴた、と大神官の動きが止まった。

その動きを見逃さずに、話を続けた。

「十年前『災厄の乙女来たり』　そう託宣を下したのはあなたですよね？」

複数のとらえ方の出来る言い方だったと思う。相手によれば、ごく普通に神からの託宣を大神官が受け取り、公表したとも　あるいは託宣そのものを大神官が下したようにも聞こえるだろう。

調べていると、簡単にマリーツィアの故郷のことが分かった。そうなれば暇を見てそこへ行くことも出来る。そこで、幼い彼女と彼女の親についても話を聞くことができた。

彼女の母親は結婚せず、マリーツィアを生んだということも。じつと大神官の顔を見つめる。顔色が悪い気がするのは、たぶん

気のせいじゃないだろう。

「彼女は、誰を恨むでもなく、ただ自分の死を願っていました」
目の前の男性からは大神官という厳格な雰囲気が消えていた。ぽつぽつと語る俺の声に怯えているようにも思える。

「俺が出会った時はまだ十四歳でした。文字を読むこともできず、自分の名前すら覚えていなかった。周囲から存在を否定され、それでも逃げることもできずにあの森に閉じ込められていた」

声の調子が強くなってしまふのは仕方ないと思った。

話せば話すほど、あの森の情景が戻って来る。夜半に聞こえるあの子守唄も。広場に横たわる冷たい妹の姿を。

「俺の妹は災厄の乙女と疑われ、村人に殴り殺されました。まだ、八歳だった」

大神官はただ俯いて、俺の言葉を受け止めていた。

一瞬だけ沈黙が落ち、ごくりと唾を飲み込んだ。唇が渴いている。

「すべて、あなたの罪です」

静かすぎる部屋に、大して大きくない声は驚くほどよく響いた。

この一年で調べ上げたことは、多くはない。

マリーツィアの故郷に、ちょうど十六年前大神官 当時は大神官ではなく、神官の地位だったはず がやって来たと。

そこで一人の村娘と恋に落ちたと。

それは手に入れるにはそう難しいことではなかった。村人はまさか村にやって来た神官が大神官にまで出世していることは知らなかったし、王都から来てわざわざそんなことを聞く人間もいなかった。災厄の乙女は、大神官が作り出した大きな嘘だ。

「……『災厄の乙女来たり。白き肌、白き髪にして深緑の瞳をもつ乙女、この国に災厄をもたらず』あなたは十年前にそう託宣を騙った。実際にどういった災厄なのかは一切語らなかった。語る内容がなかったからだ」

ただこのままでは国が危うくなる、それくらいのことしか言わなかったのだろう。大神官による託宣は尾ひれがついて国中に広がった。災厄の乙女はいつしか生まれながらにして大罪人のように語れるようになってしまったのだ。

「……神官の身で、妻帯は許されていない。あの村でのことは、一時の気の迷いだと思っていた。まさか、彼女が身籠っていて、娘を産んでいたなんて知らなかったがね」

自分の罪を懺悔するかのように、大神官は静かに語り始めた。

「もう……十年前になるのか。彼女の親が私のもとへやって来てね、一枚の写真を突き出して、養育費を要求されたんだ。その時になって初めて娘の存在を知った。その時には大神官としての地位を手に入れていたから、本当に焦った」

やって来た親はそれなりの額を渡して帰し、そして考え抜いた末に、娘を殺してしまおうと、そう語る大神官は、本来その地位にいてはいけないのだろう。

「しかし実際に娘の顔を見たら殺すことなんて出来ず、結局、神を騙ってあの子をグリーンワーズの森へと閉じ込めた」

マリーツィアは何も知らない真実だ。

彼女は自分が本当に『災厄の乙女』かもしれないと、そう悩んで苦しんで生きてきたというのに、それはたった一人の人間が作り出した嘘だった。

本当なら、母親と静かに村で暮らせていたというのに。

「私はあの子を苦しめてしまったのか」

大神官の言葉に苛立ちだけが募る。

そもそもこの男が、神の託宣など作り上げなければ、ヒルダもマリーツィアも陽だまりの中でのびのびと成長しただろうに。

「……あなたに大神官たる資格はありませんよ」

怒りは自然と口に出た。

大神官は苦笑いを浮かべて、そうだろうねと呟く。

来た頃には感じていたこの場の神聖ささえ、今の俺には感じられ

なかった。

「一つ、頼まれてくれないか。グリーンワーズの森へ行つて欲しい」
帰る間際になつて、大神官の口からそう乞われた。

「あの子が、まだ死を求めているというのなら　望みどおりにして欲しい。もはやあの子は、この王国で普通の人生は歩めない」
人々から忘れ去られようと　その記憶の奥底に『災厄の乙女』
は眠っている。

その原因を作りだしたのは自分だというのに、慈悲を与えるつもりで彼女を殺すように俺に頼むのか。

「あなたは、人として最低ですね」

しかし大神官は俺の言葉に動じる様子はない。苦笑しながらしっかりと俺を見ている。

「……ご心配なく。言われなくても、そのつもりです」

そう答え、退室しようと立ち上がる。案内役の人間が慌てて駆けつけてきたが、帰りは不要だと言つてそのまま出口へ向かう。

大神官がまだ何か言いたげだったことに気づいていたが、気づかないふりを続けて立ち去る。

そこにいるのは大神官などではなく、ただの一人の男だった。
自分の娘一人も救えない、無力な。

6：この存在の証を

馬に乗り、グリーンワーズの森へと向かった。

頬を撫でる風はまだ冷たい。森へ近づけば近づくほど、気温はわずかに下がっているようだ。

王都はとうの昔に春に彩られているというのに　あの森はやはり春でも涼しい風が吹くのだろう。それでも春の花は誇らしげに咲き誇っているはずだ。

どこか寂しく優しいあの森で。

彼女は一人、何を想うのだろう。

森に入ってから馬から降り、綱を引いて歩いた。しばらく歩いてみると塔は見えてくる。建てられてからそれほど年月が経っていないわりに、古びた印象のある塔だ。壁を這う蔦がそう演出しているのだろうか。

足元には、あの毒を持つ白い花がぽつぽつと咲いている。

周囲にも柔らかな色合いの花が咲き乱れている。王都とはまた別の彩りにどこか安堵した。

塔の前に広がる、拓けた土地。

背の短い草花が咲いているその場所は、日向ぼっこをするにはちょうど良い場所なのだろう。

野の花に囲まれて、彼女は眠っていた。

真っ白なワンピースを着て、せいぜい足首程度くらいの高さしかない草花に包まれて静かに寝ている。それは絵画のようにも見える綺麗な姿だった。

初めて出会った時も、そういえば昼寝していたなと苦笑する。

日の光を全身に浴びて、植物に囲まれて眠る姿は一年前よりもずっと幸せそうにも、その逆にも見える。食糧だけは定期的に送られ

ていたらしいが、彼女は一年この塔にただ一人だった。

「マリーツィア」

この名前も忘れてしまっただろうか、そんな不安を覚えながら彼女の名前を呼ぶ。

起きる気配のない彼女に苦笑しながら、そっと彼女の白い髪に手を伸ばす。草が髪に絡まりそうだ。

さらさらとした髪から、絡まった草を取る。

「マリーツィア」

起きるだろうかともう一度名前を呼んだ。

ゆつくりと、閉ざされていた深緑の瞳が現れた。その色が懐かしいと、思わず微笑む。

ぼんやりとした瞳は空を見上げて、そして俺を見上げた。まだ夢から覚めていないようなそんな表情で彼女はじっと俺を見つめる。

「ああ……レギオン。来てくれたんだ」

ふわりと、春の花のように柔らかく可愛い笑顔で俺を見上げる。

一年経って彼女はどこか少し大人っぽくなった。たった一年だが

十代での一年は大きな変化だろう。

「……一年ぶりだな」

それ以外に口にする話題もなく、俺は苦笑しながらそう呟く。

「ああ、まだ一年しか経ってないんだ。一日一日がうんざりするほど長いから、もう三年くらい経ってるんだと思ってたのに」

予想外に来るのが早かったんだね、とマリーツィアは俺を見上げたままで笑う。

可愛らしく、そして綺麗な笑顔のまま、マリーツィアは残酷な願いを口にする。

「それじゃあ、やっと……殺して、くれるの？」

思ったとおりのセリフに微笑み返す。自分でもどうして笑えるのか分からなかった。

腰の剣を抜き、微笑んだままで剣を構えた。

「……そんなに、死にたいか？」

同情にもとれるセリフだったからだろうか　マリーツィアは困惑したような表情で横になったまま、空を見上げるように俺を見た。「私が死ねば、レギオンの中に私は残るでしょう？　もし私が殺されて災厄がこの王国に溢れたなら、たくさんの人が私を覚えているでしょう？　このまま存在しない人間としてただ寿命が尽きるまで生きるより、誰かの中に確かに残りたい。たとえそれが憎悪であっても、災厄の象徴であっても」

マリーツィアは両手を空へと伸ばして神に祈るかのように語る。その手が抜き身の剣に触れ、指先に傷がつく。その傷から落ちた血はマリーツィアの頬に落ちた。

「私がこのとき、確かに存在したと。その証を遺したい」
深緑の瞳から、一滴の涙が落ちる。

頭の中では大神官の声が何度も繰り返されていた。もし、あの子が死を望むというのなら。

「……忘れないでしょう？」

剣を構えながら、いつのまにかお互いに微笑みが消えていたことに気づく。

そんなことをしなくても、この一年彼女を忘れられた日などなかったというのに。

「それが、望みか」

低く問うた。

マリーツィアは俺を見上げて、その瞳にはうつすらと涙を浮かべて、それでもなお笑顔を作る。

それが答えと受け取り、構えていた剣を突き刺した。

ゆっくりと閉じられたマリーツィアの目から、静かに涙が流れ落ちた。

「大神官様、こちらです」

そう言いながら案内する男に微笑み返す。

外出する度の厳重な警護に閉口しながら、今日も大人しく与えられた大神官という立場を演じる。

愛した女性も、ただ一人の娘も不幸にしておきながら自分はこの地位に居座り続けるのかと自分の中の良心が訴え続けていた。

「おい、貴様！」

ぼんやりと 深く考え込んでいたが、警護の人間の声で現実へと引き戻された。

声の方を見れば、何やら旅装束の人がこちらへ近寄ろうとしていた。深く被られたフードからは顔も見えない。体格から青年だろうということくらいが想像できる。

「気安く近寄れるような方ではないぞ。下がれ！」

見れば少し遠くと同じような格好をした少年がいた。馬の手綱を握って、こちらをじっと見ている。おそらく近づいてきた青年の連れなのだろう。

「すぐに済みます。大神官様にお渡ししたいものがあって」

そう言いながら警護兵に囲まれた青年はフードをはずす。

長い金の髪に、左目を隠すように覆われた黒い眼帯。こちらを真っ直ぐに射抜く紫色の瞳には覚えがあった。ついこの間、己の過去の罪を突き付けられた相手だ。

「おまえなどが大神官様に」

「良い

気がつけばさらに何かを言おうとしていた警護兵を下がらせ、自ら青年に歩み寄った。

「私の知り合いだ。危険はない」

それだけで兵は簡単に引き下がった。危険はないという保証はないが、もしここで彼に殺されても、今ならば悔いはない。

「……お久しぶりです」

青年は微笑みながら挨拶してくる。

どう返したら良いものかと考えていると、青年は懐から何かを取り出した。

「これを、大神官様に」

取り出したものは、紙だった。否、正確には紙に何かが包まれている。

「それと、ご報告があります」

芯の強そうな紫の瞳に射抜かれる。

何故だろう。その瞳が恐ろしいと感じた。突然の嫌な予感に、胸がざわついた。青年は周囲を気にしているのだろうか、声が小さい。

「災厄の乙女は死にました」

それは、予想通りの言葉だった。青年に掴みかかりたい衝動に駆られながらも、呆然として身体は動かない。

そして青年はそっと包みを開けた。紙の中に大事そうに、宝物のように包まれていたのは、長く白い髪だ。

涙が込み上げてくるのを感じた。涙を流す資格などないと、今まで何度か言い聞かせたというのに。己の娘を不幸の底へ落したのは他ならぬ自分なのだ。

それでも、出来ることなら幸せにしてやりたかった。今までの不幸の分、これ以上ないというほどに。

たとえばそれが叶わない夢なのだとしても。

青年はしばらく私を見つめた後で一礼して、待っている少年のも

とへと駆けていく。

フードをかぶり直しながら、青年は少年の手から馬の手綱を受け取っていた。そして微笑みながら少年に手を差し出す。

「行こう、マリーツィア」

その名前に、涙が引いた。

忘れるわけがない。ただ一人の娘の名を。

呼ばれた少年　否、少女はこちらを見ていた。深い森と同じ色の瞳と一瞬だけ目が合う。

ああ、私は騙されたのか。

否、災厄の乙女は死んだのだ。私が自分の罪を認めたあの時に。

彼女はただのマリーツィアだ。

少女は踵を返し、青年と手を繋いで人ごみの中に消えていく。

フードから零れた雪のように真っ白な短い髪が、いつまでも目に焼きついて離れなかった。

7：幸福の訪れ

椅子に座っている彼女の髪を切りそろえながら、床に散らばった髪を見る。

「少し、惜しかったな。これほど伸ばすのに時間かかるだろ」
彼女の白い髪は老人なんかの白髪しろがと違って、艶やかでとても綺麗だ。それが今は肩にも届かないくらいしろがの長さしかない。

「何を今さら。レギオンがやったくせに」
俺を見上げて彼女は頬を膨らませる。

「ごめん、という言葉が素直に出てこなかったのは、こうでもしないと彼女が納得しなかっただろうと確信しているからだ。

床に散ったのは『災厄の乙女』だ。

「でも、これくらいの方が軽くていいや。自分で切るのが面倒で伸ばしてただけだし」

短くなった自分の髪を触って彼女は嬉しそうに笑う。

その笑顔に、かつてあったような影はない。年相応の明るい笑顔にこちらの方がむしろほっとした。

散らばった髪をまとめ、丁寧に紙に包んでいると彼女は訝しげにこちらを見た。

「……何してるの？」

「まあ、ちよつとな」

誤魔化しながら包みを懷にしまう。

行こうか、と彼女に手を差し伸べると、当然のように手が繋がれる。

まるで随分前からこうすることが当たり前だったみたいだ、と言おうとして止めた。それこそまるで愛の告白かなにかのようじゃないか。

「レギオン？」

どうしたの？ と見上げてくる彼女に「何でもない」と返した。

塔を出て日の光を浴びる彼女の髪は不思議な色で輝いていた。
やっぱり惜しかったな、という言葉は無駄なような気もしたので
心の奥にとどめておくことにした。

* * *

胸を、あるいは首を貫くだろうはずの剣は、マリーツィアの左肩
に触れることもなく、彼女に傷一つつけずに地面に突き刺さった。
長く白い髪だけが不揃いになっている。

「え？」

一向に訪れない痛みにも、マリーツィアは目を開けて状況を確認す
る。

わずかに起きあがると、左側の髪だけがさらさらと地面に落ちた。

「……災厄の乙女は死んだよ」

肩に触れないくらい短くなった自分の髪を触って、マリーツィア
はしばし呆然とする。

「何、言ってるの！？ 私はまだ生きて」

掴みかかるマリーツィアを、そのまま強く抱きしめた。剣は彼女
の髪を道ずれに地面に突き刺さったままだ。

「災厄の乙女なんて、最初からいなかったんだ。そんなもの、初め
から存在しなかった」

抱き寄せた肩は想像以上に華奢だった。不揃いな髪を撫でて、お
互いのぬくもりが溶け合うように強く抱きしめる。

「大神官が作り上げた偽りだった。おまえには王国を滅ぼす力も、
誰かを不幸にする力もない。ただの、女の子だったんだ」

マリーツィアは腕の中で困惑したように動く。

「だって、それじゃあ」

今までの私の人生はなんだったの？

その呟きに、答えはなかった。

何も言えずに、ただ腕の力を強めるだけだ。マリーツィアは腕の中でいくつかの疑問を吐き出し、幼い子供のように泣き始めた。

その鳴き声が止むまで、俺はただその小さな身体を守るように抱きしめ続けた。

「あああああああああつ！」

かつての自分の咆哮に似たその叫びに胸が苦しくなった。

泣き声が途切れ途切れになり、腕の中の彼女が大人しくなり始めた頃には、空はもう赤く染まっていた。

それでもどちらも動こうとせず、ただ花に囲まれて抱き合うように座っている。

幼子を慰めるようにぼんぼんと優しく背中を叩きながら、まだ静かに涙を流すマリーツィアを優しく抱きしめる。

あの子はもう、この王国で普通には暮らせない。

自分の罪に押しつぶされそうになりながらそう言った大神官の顔が何度も頭の中でよぎった。

マリーツィアが白い髪である限り、彼女の瞳がこの森と同じ色である限り、彼女はこの王国で平穏に過ごすことは出来ないだろう。それこそ大神官が託宣を撤回しない限り。否、おそらく撤回されても差別は続くだろう。彼女の存在を否定する人間は消えないだろう。ならば。

「俺と、一緒に来るか？」

唐突な問いに、マリーツィアは涙で濡れた顔を上げて俺を見つめた。

その顔を見るのは少し恥ずかしくて、俺はその視線を感じながらも赤く染まる空を見上げて続けた。

「俺と一緒にこの国を出るか？」

大きな瞳は不安と期待で揺れているだろう。どことなく、彼女の出す答えは分かる気がした。

「出て、どうするの？ どこに、いくの？」

幼い子供のような声に、思わず微笑んだ。

彼女の髪を撫で、深緑の瞳を見つめて言う。

「どこか遠い 災厄の乙女なんて知らないような、遠い国にくしゃ、とマリーツィアの顔が歪む。

俺の胸に顔を押しつけ、せつかく止まった涙がまた溢れ出した。

「連れてって……！」

予想通りの言葉に、思わず笑みが零れた。心のどこかで安堵すらした。

死を願う少女はもういない。そして、災厄をもたらす少女は初めからいなかった。

ここにいたのは、この国で誰よりも不幸だった可哀想な女の子だ。

泣き疲れて眠ったマリーツィアを抱き上げ、一年ぶりに塔に入る。マリーツィアの部屋までゆっくりと階段を上り、不揃いなままの白い髪を見てどうにかしないと、と苦笑する。

部屋を開けてベットに寝かせる。どうやら彼女は掃除はできるらしい。できるようになっただけかもしれないが 部屋に埃はなく、一年前と変わらず生活するに十分な、清潔な空間のままだった。

ベットに腰掛け、何度も見たマリーツィアの寝顔を眺める。

何かを求めるようにマリーツイアの手が彷徨った。咄嗟にその手を握ると、安堵したようにマリーツイアは布団にくるまる。猫みたいなのその様子に微笑みながら、髪を優しく撫でた。手の中のぬくもりに、癒されているのは自分の方かもしれないなんて思いながら。

* * *

「マリーツイア？」

彼女が目を覚まし、準備を整えてすぐに、森を出ることにした。そして森からちょうど出るところで、マリーツイアの足が止まった。

繋がれていた手が自然と別れ、残ったぬくもりが寂しさを主張した。

マリーツイアは立ち止ったまま足元を見つめ、そして前を見た。足が少し震えているような気がするの、見間違いではないだろう。彼女がこの森の外へ出るの、十年ぶりになるのだ。

グリーンワーズは、彼女を守る鳥籠だった。

す、と手を差し出す。

マリーツイアは少し怯えたような目で俺を見つめた。

「行こう、マリーツイア」

微笑みながらそう言うと、マリーツイアはじっとこちらを見てきた。まるで心の底も見透かすような緑色の瞳で。

差し出した手にその小さな手を重ねて、ほっとしたように彼女は

微笑む。

「ねえ、レギオン」

離れないように強く手を握り締めながら、彼女は俺を見上げた。答えずに彼女の顔を見ると、ふわりと柔らかく微笑んだ。

「わたしね、あなたに出会えて良かった」

思いがけないセリフに、俺は目を丸くする。マリーツィアはくす、と笑って、背伸びをする。くい、と手が引つ張られてバランスが崩れる。

唇に重なるぬくもりに、目の前の深緑の瞳。

一瞬何が起きているのか理解できず　理解できた時にはぬくもりは消え去っていた。

「たぶんレギオンに出会えたことが、私の人生で最大の幸運だよ」満面の笑顔でマリーツィアはそう言う。

キスをしたそのあとに、そんなことを言うか。

繋がれていない手で口を覆う。十以上下の小娘にしてやられた気分でいっぱいになった。

「ホント、見た目に似合わず危ない女だな、おまえは」

敗北宣言に近いそのセリフに、マリーツィアは嬉しそうに笑う。

可愛い外見に騙されたら、ひとたまりもない。じわじわと侵食して、いつの間にか心は侵されている。

くすくすと笑う声が止む。

十年間、彼女を苛み守ったグリーンワーズの森。

マリーツィアはじつとその緑色の瞳で森を見つめて、立ち尽くした。かける言葉もなく、またかけるべきでもないと思ったので黙ったまま、その小さな手を握り締めた。

「行こう、レギオン」

しばらくそうして見つめ続け　マリーツィアは踵を返す。
もう森を振り返らない彼女に代わり、最後にちらりと森を仰いだ。
花に囲まれたまま、剣を道ずれに彼女の欠片は森に残った。まるで
地面に刺さった剣が墓標のように。

深い深いグリーンワーズの森の中、花々に囲まれて『災厄の乙女』
は眠っている。

7：幸福の訪れ（後書き）

読了ありがとうございます。

この作品は「春・花小説」として、花言葉をテーマに書きました。

鈴蘭の花言葉は最終話のサブタイトルと同様「幸福の訪れ」です。
不幸な少女であるマリツィアに幸せがやって来るという意味合い
でこの話を書きました。

さらに「幸福が戻ってくる」という花言葉もあります。そちらはレ
ギオンをイメージしました。

初めから幸せを知らないマリツィアと、妹が生きていた頃と同じ
ような　それでいてどこか違う幸せをその手に戻したレギオンの
物語となりました。

春を彩るには力不足な気もしますが、鈴蘭の花を見たときにでもマ
リツィアを思い出してくださいませ。

花言葉の出典先

春・花小説企画／花言葉一覧

<http://event.s0etc.nobody.jp/hana-plan/hanakotoba.html#may>

雑学花言葉

<http://www.001.upp.sonet.ne.jp/Mikan/hana/index.htm>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5469g/>

グリンワーズの災厄の乙女【第一部・迷いの森編】

2011年3月8日00時26分発行